



### I-OWA マンスリー・セミナー講演より 江戸に学ぶシリーズ(1) 「和」の精神と江戸時代の基礎知識

講演：岡本 和久  
レポーター：赤堀 薫里

日本は非常に長寿企業が多いのです。背景には、日本独自の精神構造があるのではないかと思います。もともと我々が持っていた「和」のDNAが江戸時代に熟成され、より洗練されたのではないかと思います。その意味で我々はもっと江戸のことを知るべきでしょう。

企業の経営スタイルが長期志向の企業ほど長期投資に向いています。企業経営が非常に短期的な企業に長期投資するのはどうなのかと疑問を感じます。経営スタイルと投資方針は相互に影響し合っているのではないかと思います。

日本には創業500年以上たっている企業が39社あります。400年以上は191社、300年以上605社、200年以上は1,191社、100年以上は26,144社と、大変多くの企業が長い歴史を誇っています。創業300年以上、年商50億円以上の企業の中で一番歴史が古いのは、創業578年の「金剛組」。次に「剣菱酒造」、「虎屋」、「小西酒造」と続きます。

創業200年以上続く世界の主要企業の中で、驚くことに日本は43%を占めています。なぜ日本に長寿企業が多いのか三つ理由を挙げてみると、一つ目に侵略や内乱がなかったという歴史的な側面、二つ目に和、創意工夫、伝統、質素儉約、勤勉を尊びつつ、他者を受け入れる日本の文化的な側面、そして三つ目に日本的経営の考え方として、平時も有事も事業継続のための身の丈に合った経営を志す傾向があることが挙げられます。

それでは基本的な日本人の本質は何処から来ているのでしょうか。まずは温暖な気候です。豊かな自然があり、生活環境にも恵まれているせいか、基本的に楽観的です。同時に突発的な災害も起こります。それでも「しょうがない」と運命を受け入れてしまう。収穫が好きで、これがいまでも多くの投資家の実現益を好む原因かも知れません。

冬が来てもじっと我慢していれば春が来ることを疑いません。ある意味、抜本的な改革をせず、構造変化に弱い面がある。島国のため、内側と外側の違いを明確にします。また辺境性という日本



## 長期投資仲間通信「インベストライフ」

の特殊性があります。より高度な文化は常に外からやってくるので、出来るだけ早く新しいもの、外国のものを取り入れて日本のものと合体させるという傾向があります。

日本型サステナブル企業			
創業年	江戸時代以前の創業	家康・秀忠・家光時代の創業	家綱・綱吉・家宣時代の創業
578	金剛組	竹中工務店	小津産業
1505	剣菱酒造	松坂屋	大木
1521	虎屋	ヒサヤ大黒堂	西野金樓
1550	小西酒造	ベトロスター関東	浅香工業
1560	鍋屋バイテック	炭平コーポレーション	井上喜
1566	西川産業	アオキトランス	キッコーマン
1566	京都西川	丸栄	東急百貨店
1566	西川リビング	ヒゲタ醤油	東急百貨店
1584	ヤマトインテック	カステラ本家福砂屋	宮坂限達
1585	メルクロス	矢尾百貨店	モリリン
1586	松井建設	ホリグチ	辰馬本家限達
1590	住友金属鉱業	両口屋是清	森六
1592	日本香道	月桂冠	ユアサ商事
1592	ヒガシマル醤油	九州東邦	マツモト交商
1597	桑名屋	ヤマサ醤油	さとう
1598	綿半鋼機	児島洋紙	岡谷鋼機
1602	養命酒酒造		三越
			三木産業
			酒悦
			田辺三登製菓
			シマコー
			山本山
			住友林業
			川島エスエス献材
			林業オフィスビル
			ディング
			にんべん
			大沼
			福田金属粉砕工業
			外興
			外興
			材機木材
			IzutsuMother
			井筒
			大塚産業クリエイツ
			赤福
			大関
			国分
		2014年時点で創業30年以上、年商50億円以上の企業 家康～家光：1603～1651 家綱～家宣：1651～1712	
			田久保善彦著「創業300年の長寿企業はなぜ栄え続けるのか」(東洋経済新報社)

© I-O Wealth Advisors, Inc. Kaz Okamoto, 2012, all rights reserved

そのような環境のなかで、日本人の心情というか、DNA に大きな影響を与えた 3 つの要因として、①農耕民族性、②「和」の精神、③仏教・老荘思想があげられます。

一つ目の農耕民族性は、農耕民族は種をまき、全てが芽を出さなくても一定の確率で収穫することができます。しかし狩猟民族の場合は、森に獲物がいなければ帰ってくるしかない。株式市場という森の中に入り、一発勝負で銘柄を選び、成功するか失敗するかということです。農耕民族はインデックス運用みたいに、とりあえずばら撒いておいて、どこからか芽が出るようなところがあります。

二つ目の「和」の精神ですが、「和」には二つの意味があります。一つは足す、加えるという意味です。異なったものを取り入れてそれらを今まであったものと同化していく。これが「和」の二つ目の意味です。仏教が入ってくれば神道と習合する、漢字がもたらされるとカタカナやひらがなを創る。



## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

さらにアンパンから明太子スパゲティまで枚挙にいとまがありません。今風に言えば「ダイバーシティー」を重んじ、それを同化させ調和していくということでしょう。

大昔から色々な民族がこの国土に住み着き、そこで和を重んじながら調和をもたらし、それが国家として出来上がってきた。国家としての体裁が整い始めたのが聖徳太子の頃です。聖徳太子がつくったと言われる十七条の憲法で「和をもって尊しとなす」と最初にあるのはそれを反映したものではないでしょうか。その意味で時代はずっと遅れますが色々な民族が集まり一つの国として成立したアメリカと似ています。

三つ目の「仏教・老荘思想」も大きな影響を与えています。インドのヴェーダ哲学が仏教を生み出し、中国で老荘思想として発展し、さらに日本古来からあった神道と融合していった、何か大きな流れを感じます。

では、なぜその中で江戸に注目するのか。安土桃山時代くらいから日本の中で資本主義の芽生えが始めてきました。楽市楽座があり、貨幣も輸入から自国で作るようになり、今日の資本主義の萌芽が江戸で開花し始めました。

江戸時代は、外との交渉を断ったため、日本という国内で、完全に自給自足をする経済にならざるを得なかったといえます。今は世界全体がそのような状況になりつつあります。資源の問題を考えても、これ以上成長していけるのか皆が疑問に思い始めています。その点で江戸時代にあった考え方が、今日でも非常に意義があると思っています。

このあと講演では、江戸時代の時間や通貨の話や、豪商の変遷、淀屋の繁栄と没落、大阪堂島米会所の歴史について、封建社会解体のプロセスや、田沼意次の成長戦略を解説いただきました。次回は豪商達の生き残り戦略と、江戸時代の経済に対する考え方、商人道についてお話しいただけます。